



AMS MathSciNet インタビュー



数学研究の必須データベースである MathSciNet について、お話を伺いました。

富山大学 学術研究部理学系
木村 巖 准教授

MathSciNet により実現する網羅的な研究動向の把握

自分の研究テーマに該当する MSC※の項目において、比較的最近の（数年以内の）文献を網羅的にチェックするためにしばしば MathSciNet を使用する。これまでなじみの薄かった新しい研究テーマに取りかかる際に、おもだった論文・書籍を見つけることや、研究の流れや主要な研究者を把握するために、通時的に文献を網羅することができる。また、特定の研究者がこれまでどのような著作を出版しているか、通時的網羅的に追うことで（仮想的な全集を編んで）多くを学ぶことができる。こういったことから、研究への貢献度という点では極めて重要であり、MathSciNet は研究において必須のツールである。 ※MSC : Mathematics Subject Classification

MathSciNet の活用方法

- 特定のテーマ・主題に絞り込んだ情報を探す – MSC を使って検索することで可能に。例えば MSC と出版年が何年以降、と絞り込むことで、特定の主題に関する文献の存在を網羅的に知ることができる。また、富山大学数学教室では、年刊の学術誌 Toyama Mathematical Journal を刊行している。Editor の一人として、例えば査読者の選定の際に投稿論文と同じ MSC の分野で最近論文を執筆した研究者をリストアップするという用途もある。
- 周辺的な主題についての要約を調べる – Review が便利な要約となることが多々あり、活用できる。
- 論文・論説の執筆の際の参考文献欄を自動で生成する – 文献の書誌情報を、bibtex, AMSRefs, Endnote などの形式でダウンロードできることで可能に。特に文献表を作成する際に、MathSciNet から書誌情報を bibtex フォーマットでダウンロードできることは、手間を省くのみならず、手入力による誤りを防ぐこともでき大変便利である。

今後の MathSciNet に期待する点

現在 MathSciNet のベータ版がテスト中だが、変更後のインターフェースに期待することとして、より時代の流れに沿った web のユーザビリティの向上がある。また、MathSciNet の API が有償でもよいので公開されることを希望する。例えば TeX 編集ソフトとの API を使った連携が実現すると、論文執筆時の効率が格段に上がるので望ましい。ユーザーにとってもプラスになるし、AMS にとってもそのビジネスにもっと周辺的なエコシステムができるのではと感じる。

(AMS, USA / 日本国内総代理店 丸善雄松堂)

— MathSciNet のご利用・ご導入にあたってのお問合せは、最寄りの丸善雄松堂 営業支店または下記までご連絡ください —